

斜め発射

稲宮 健一

日本では一度社会に定着したことを踏襲するのは易しく、それを覆し新しい芽出しするのは難しい。宇宙開発の初期にそのような例を経験した。

内之浦から打ち上げられる初期のロケットの打ち上げ方向は垂直から少し斜めに太平洋に向かって設定された。打ち上げの公式発表に発射角何度という項目が入っていた。これは秋田の道川時代からの延長で、海外との交流の少なかった当時の既定の打上方法であった。

研究室の延長上であった内之浦の開発を発展させても世界の潮流に追いつけないと判断し、米国から開発済みの技術を導入し実用衛星を打ち上げることにした。米国は仕事始めに当たり、日本の現状を理解するため調査団が派遣された。その結果、作業項目の一つに打ち上げ時の安全確保に新規な開発をすべきと助言した。これに対して、宇宙開発事業団の担当の幹部が日本のロケットは太平洋に向かった斜めに発射しているので、打ち上げに失敗しても海に落下するので安全である。打ち上げ時の安全確保に新たな技術パッケージの予算を請求できないと主張した。これを聞いた米国の調査団は事業団全員を集めて、紅蓮の炎が飛び散る射点の爆発の様子を記録した動画の映像を公開した。それを見て、即座に飛行安全の契約を受け入れることにした。

戦前欧米では宇宙船などの夢が語られたが、日本では航空機の開発がそれに相当した。戦後、航空機の開発が再開されると、糸川英夫は戦前に戦闘機の開発で磨いた技術を生かし内之浦のロケット開発を主導した。ペンシル・ロケットで始まる糸川の夢は超音速航空機や、成層圏飛行で、大陸間を短時間に飛行できる夢の実現であったようだ。道川から続く発射方法に特別なこだわりを持っていなかったようだ。しかし、後輩の宇宙開発事業団の幹部はこれを既成事実として、実際の危険な姿を見せられるまで発想の転換を拒否した。低成長の失われた十年は高度成長時代の既成事実に縛られ、自由闊達な活動をさぼった結果であろう。